

委託事業実施内容報告書

平成23年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【日本語指導者養成】

受託団体名 HAHAHA

1. 事業の趣旨・目的

外国人児童生徒の中には“日本語がわからない”という言語の問題だけでなく、異文化社会における生活等による情緒不安、発達障害、学習障害、DV、虐待、情複合的な「困難」を抱えている子どもが少なくない。しかしながら、市内公立学校においては、外国人児童生徒の担任を経験した教員の間でさえ、彼らが置かれている状況への理解が進んでおらず、支援のノウハウも蓄積されていない。本年度は受講対象を教員に絞り、外国にルーツ・つながりをもつ児童生徒の個々の困難を知り、解決に導くための知識、技術を身につけることを目的とした。

2. 運営委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
6月3日	総合福祉センター	佐々木千里 櫻井千穂 川上喜美恵 飯田弘子 渡邊あづさ 菊池寛子	研修の内容、方向性の検討	今年は教員を対象にして、一人でも多くの教員が参加しやすいように、夏休みに講座を3つ設ける。 参加者一人だけとなっても、一人の理解者ができればそれは成果とする。
9月23日	総合福祉センター	佐々木千里 櫻井千穂 川上喜美恵 飯田弘子 渡邊あづさ 菊池寛子	中間ふりかえり	参加者の様子、理解度、興味、関心などから、後半のもって行き方を確認。
12月22日	総合福祉センター	佐々木千里 櫻井千穂 川上喜美恵	ふりかえり	成果、反省点、来年度の目標

		飯田弘子 渡邊あづさ 菊池寛子		

【写真】

3. 養成講座の内容について

- (1) 講座名 考える力を伸ばし、個々の困り感に寄り添う
～教育・医療・福祉の連携のために～
- (2) 開催場所 総合福祉センター
- (3) 学習目標 外国にルーツをもつ児童生徒たちの抱えている”困難さ”を理解し、解決へと導いていくための知識・技術を身につける。
- (4) 使用した教材・リソース 各講師が準備
- (5) 受講者の募集方法
愛知県教育委員会、西尾市教育委員会、近隣市教育委員会の後援を得て、各小中学校にチラシを配布。
- (6) 受講者の総数 27 人
(出身・国籍別内訳)
日本 27 人
- (7) 開催時間数(回数) 21 時間 (全7回)
- (8) 参加対象者の要件 教職員
- (9) 講座内容

回	開催日時	時間数	受講者数	講座名／学習内容	講師
①	7月30日 13:00～16:00	3時間	5人	受講生ニーズ分析 西尾市のプレスクールプログラム ～就学前指導の意義～	中野郷保育園 川上 貴美恵
②	8月10日 13:00～16:00	3時間	9人	外国にルーツをもつ子どもの 家庭とどう関わっていくか	社会福祉士 早川 真理
③	8月19日 13:00～16:00	3時間	8人	外国にルーツをもつ子どもた ちのなかで、発達がきになる 子	西尾市立矢田小学校・福地北 部小学校 通級指導担当 辻 千都世
④	8月27日 13:00～16:00	3時間	7人	学校における支援システム の構築	社会福祉士、 スクールソーシャルワーカー・ スーパーバイザー 佐々木 千里

⑤	9月17日 13:00~16:00	3時間	9人	インターナショナルスクールにおける 日本語指導の取り組み 教科学習へつなげるための内容重視 クロスカリキュラム	関西学院千里国際大阪イ ンターナショナルスクール 有本 昌代
⑥	10月15日 13:00~16:00	3時間	9人	二言語での対話型支援付き 読み学習の有益性について	専修大学非常勤講師 大阪大学大学院博士課程 櫻井 千穂
⑦	11月26日 13:00~16:00	3時間	5人	よりよい環境づくりのために	スクールソーシャルワーカー・ スーパーバイザー 佐々木 千里

(10) 講座の評価

① 受講生に対するアンケート

回	大変満足	満足	まあまあ	やや不満	不満	無記入
1	2	2	0	0	0	1
2	6	1	1	0	0	2
3	2	3	1	0	0	2
4	5	2	0	0	0	0
5	4	5	0	0	0	0
6	5	3	1	0	0	0
7	5	0	0	0	0	0

【受講生の評価(アンケートから抜粋)】

- ・ワークショップ形式でコミュニケーションしながら多くを学べたことに大変満足した。
特に深刻な事例をもとに話し合いを深めることに大きな意味がありました。
- ・指導者のコミュニケーション能力の育成が大切。
- ・子どもの支援、親の支援、上司との交渉、ロールプレイングは本当に勉強になり、人を傷つけない言い方、認める言い方等今後の教員生活で役に立てたい。この3時間は私にとってとても貴重な経験となりました。
- ・連携する人たちとの関係をよくする話し方も重要だとよくわかりました。でもむずかしいです。
- ・「発達が気になる子」について疑問に思っていたことが、少し糸口が見つかった気がします。ありがとうございました。
- ・個々の問題は個を取り巻くいろいろな環境要因がかかわっている。重なっている部分もあり、その子の情報を集めることが大事。
- ・学校内の連携を構築していくこと。

- ・教科と関連させた日本語学習独自の単元作りのヒントをいただいた。ぜひ実践してみたい。
- ・よい読書習慣を身につけることが大切だとわかった。
- ・就学前の母語の文字習得もとても重要。
- ・長期的な計画を持って進めることの重要さに気づかされた。どの段階でどのような本を読んで支援をしたらよいかも具体的な話が出て大変参考になった。
- ・愛知県の小学校の状況と京都の小学校の状況を比較することができた。

② 実施主体からの研修内容結果評価

3 年連続「連携」をキーワードに講座を進めてきた。そして本年度は「困り感に寄り添う」ことがテーマであった。“困り感”とは、『困った子』ではなく、『困っている子』、『困っている保護者』、『困っている担当者』のことである。受講生の中には、子どもの環境の一つである教師との関係の改善(コミュニケーションの向上を図ること)を課題とし、みごとに環境を改善され、保護者向けに「家庭教育通信」を渡すようになったり、「困り感に対する個別の支援」について教育テーマとされ研究論文を作成されたりした方がいる。これはその受講生に対して本講座の成果があったと言えるのではないだろうか。

③ 実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

本年度は学校内で環境をかえた受講生がいるので、ぜひその受講生の実践報告会を開催し、「困り感に対する個別支援」方法の提案をしていただき、教師間の情報交換、意見交換を活発にできる場を企画したい。そして、西尾市役所内には各部署で通訳業務に関わる人たちがいる。彼女たちがいろんな「困り感」に遭遇したときに、どのように対応していたらよいのか、情報共有、学べる機会を企画したい。そして、専門家へとつなぎ、それが教育現場と連携できるようにしたい。

(11) 事業の成果

① 他事業との連携

就学前のプレスクールだけでなく、本年度開始した義務教育課程を修了した過年齢の子どもたちの高校進学支援教室と連携し、子ども支援に関するさまざまな情報共有をすることができた。

② 研修後の人材活用

指導主事が外国人児童生徒担当者会議のときに、本講座受講生に研修の報告をするよう取りはからってくれた。

研修後、各自が学校現場で子どもをよく見て、連携、環境改善のためにいろいろと働きかけをしている。来年度は各自の実践報告会を設ける予定。

(12) 今後の課題

受講生たちが本講座内でなく、愛知県内の他の講座などにもでかけるようになり、ネットワークが徐々に広がってきている。受講生たちの発信する機会、切磋琢磨する機会を引き続き設け、子どもたちのおかれている環境改善を進めていかなければならない。

いろんな困り感に寄り添い、解決に向かうサポートができるように、システムの構築も必要である。